Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-20

# （報告）アスベスト被害に関するマンガ『石の綿』制作について

松田, 毅

(Citation)
21世紀倫理創成研究,5:48-54

(Issue Date)
2012-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81003891

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003891

KOBE UNIVERSITY

# （報告）
# アスベスト被害に関するマンガ『石の綿』制作について

松田毅

## はじめに

倫理創成プロジェクトは、平成 19 年（2007 年）度の人文学研究科改組時に、文化学研究科の旧倫理創成論講座の担当教員が中心に立ち上げたものです。それ以来、人文学における先端的学際研究として「知識基盤社会に相応しい大学院教育」を目指し、グローバル化と科学技術時代における新しい倫理規範の諸問題を研究し、21 世紀の倫理創成の可能性を学際的に探求することを目的としてきました。その立ち上げ時に、この紀要、『21 世紀倫理創成研究』も発刊することとなり、今号で 5 号を迎えます。

倫理創成プロジェクトは、発足以来、「リスク社会の倫理システム構築」と「多文化共生の倫理システム構築」を課題に掲げ、哲学、倫理学、社会学、地理学、文学、心理学などを専門とする教員と大学院生等がともにプロジェクトを推進、展開してきました。

こうした中で、特に継続して「リスク社会の倫理システム構築」の課題 (1)に取り組む中で生まれた共同プロジェクトが、京都精華大学大学院マンガ研究科とアスベスト被害に関するストーリーマンガを制作することです (2)。この誌上をお借りして、マンガ『石の綿』（仮題）制作の趣旨、研究上の位置づけ、これまでの経過についてご報告させていただき、あわせて作品のご紹介をさせていただきたいと思います。

## アスベスト問題を描いたマンガ出版の趣旨

アスベストによる健康被害は、我が国を含む、工業国の近代産業史の中で世紀を超える、長い歴史をもつと同時に、現在、経済発展を続ける、アジア地域での拡大が今後、非常に懸念される問題でもあります。また 2005 年、尼崎に端を発するいわゆる「クボタ・ショック」以後の日本のアスベスト問題の展開は、環境リスクの問題解決にあたって、どれほど市民運動が重要であるかを如実に示した歴史的事例であると言えます。私たちは、倫理創成プロジェクト開始以前の 2006 年 5 月に、この問題に関わる、車谷典男、古川和子、飯田浩、粟野仁雄らの各氏を招聘し、シンポ

ジウ「ノン・アスベスト社会のために――人文社会科学の観点から」を倫理創成研究会として開催以後、一般公開の講演会、研究会等を積み重ねるとともに、阪神地域を現場として、学部のESDコースと大学院の倫理創成論演習で学生・院生とともに関係者の方々へのインタビュー活動を続け、その記録の多くをweb上（http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ethics/research/asbestos.html）に公開するとともに、関連する調査と研究を行い、その結果を論文等の形で発表してきました[(3)]。

しかし、アスベストリスクは、様々な職業と関わる多様な曝露様態、関連疾病と発症までの長い時間、病気の深刻さ、そして補償とその制度上の複雑さなどに関わる専門的内容を含むため、一般市民や若い世代に理解していただくためには、研究結果を学会発表や雑誌論文等で公表するだけでなく、内容をより近づきやすいものにするための表現上の工夫が不可欠である、と思います。

私たちは、これまで国内外のアスベスト被害者、その被害者の支援活動やリスク防止を推進するNPO関係者、多様な研究者、行政担当者や法律、医療の専門家そして神戸大学の学生・大学院生とともにアスベストによる健康被害の調査研究に取り組んできましたが、今回、プロジェクトの成果を踏まえて制作する、アスベスト被害に関するストーリーマンガを広い意味の「リスクコミュニケーション」に役立てることができないか、と期待しています。マンガは、現在では、我が国の文化として国際的に認知されていますが、その点を活かし、アスベスト被害の歴史と現状を広く日本社会と世界に伝達し、歴史の事実と教訓として後世に継承することを目指すだけでなく、2011年3月の東日本大震災以降危惧される、震災がれきから飛散するアスベスト曝露を始めとして、今も課題が残る、アスベストによる健康被害を防止するための環境教育、啓発活動に活用できるものと考えています。

## これまでの経過

私たちのプロジェクトの取り組みの特色のひとつが、教員と学部学生、大学院生とが共同し、「アクションリサーチ」型フィールドワークを行い、研究企画を実施する点にあります。このようなスタイルは近年の学部および大学院の教育改革プログラムの実践とも関連するものですが、それは、精華大学との共同プロジェクトの実施に際しても発揮されています。

マンガプロジェクトの場合も、2010年前期に学部のESD（環境人文学）演習、大

学院の「倫理創成論演習」等での授業の場を通して、両大学の教員と学生が参加し、様々な関係者からお話をうかがい、尼崎、泉南、神戸等で現地調査を行う機会を持ちました。また、被害に苦しむ方のトラウマ的心理の理解を深めるため、精神科医の宮地尚子一橋大学教授を招聘したワークショップを開催し、こうした問題を表現する際に留意すべき倫理面の課題も学びました。その後は、有志によるプロジェクト方式で追加調査を行いながら、神戸大学側でプロットを制作し、それを基に京都精華大学の大学院生によるネーム（「マンガの設計図」）の作成が始まりました。以降、両大学チーム間で推敲を進め、協力いただいた関係者にネームを配布、何度かチェックを受けてきました。

そして 2011 年 6 月 26 日にフォーラム「アスベスト被害の深層を問う集い　調査研究・伝達方法・国際協力」を神戸大学で開催し、関係者にもご参加いただき、作品の紹介および意見交換を行い、修正点を確認した上で、プロットの書き直しも含めた、調整を行い、パイロット版作成の段階に来ています。

このようにひとつの大学、ひとつの専門分野の枠を超え、多様な人々とともに取り組む、共同プロジェクトの意義をあらためて人文学分野の側から見直すとき、そこに人文学の教育研究活動に関して独自の社会的説明責任を果たすことができる、新しいスタイルの活動、ひとつの実験があると考えることができます。この実験が、アスベストによる健康被害とそのリスクという、具体的で深刻な社会問題に対する、国際的かつ学際的な共同研究の一帰結でもあり、また、地域の方々との連携活動からの発展型でもある点、そしてその背景に関して、多少の説明を補足させていただきたい、と思います。

私たちは、すでに述べましたように、学部と大学院の学域横断的科目の中で、特に、平成 19 年度以降、アスベスト問題に関して、神戸大学の他部局を始め、国内外の他大学、他機関の研究者、専門家、NPO や市民活動家など、いわゆる「文理」の枠を超えて、連携協力をしてきました。その内容の一端は以下の研究会からもうかがわれるものと思います。括弧内に簡単な説明を付記します。なお、その記録のほとんどは、既刊『倫理創成ニューズレター』および『倫理創成研究』（http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ethics/research/JIE.html）に公刊されております。

2006 年 5 月　「ノン・アスベスト社会のために――人文社会科学の観点から (I)」

（クボタ・ショックの問題）

2006 年 11 月　「ノン・アスベスト社会のために（II）――被害と責任の構造を考える」（泉南国賠問題と薬害問題）

2007 年 5 月　「ノン・アスベスト社会のために（III）――環境リスク評価と管理の観点から」（疫学と化学）

2007 年 12 月　「ノン・アスベスト社会のために（IV）――ESD とアクションリサーチの観点から」（学生の主体的取り組みとアスベスト問題の報道の歴史）

2008 年 5 月　「『石の肺―アスベスト禍を追う―』を書いて」（作家、佐伯一麦氏の講演）

2008 年 11 月　「ノン・アスベスト社会のために（V）――リスクコミュニケーションの課題と実践」（マスク・プロジェクト、看護の視点、ここでフランスのドキュメント作品、‘Amiante : chronique d'un crime social’（2005）が紹介され、マンガ制作の動機となった [(4)]。）

2010 年 6 月　「トラウマを語ること/語らないことと支援者の役割―ノンアスベスト社会のために（VI）」（トラウマの理解と被害の表現）

2010 年 12 月　フォーラム「公害被害の歴史と現在 : 語り継ぎと学際的研究」（西淀川、水俣、四日市公害、アスベスト問題などの語り継ぎ）

2011 年 6 月　フォーラム「アスベスト被害の深層を問う集い　調査研究・伝達方法・国際協力」（マンガの内容検討と横浜市鶴見区旧朝日石綿工場周辺の健康被害に関する学際的研究の報告など）

さらに、平成 20 年度から 22 年度の 3 年の間、倫理創成プロジェクトの関係教員と院生を核として、日本学術振興会とフランス ANR が支援する、国際的・学際的な共同研究『日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患―空間的マッピングと人文学的研究―』を実施し、共同で泉南、尼崎、神戸およびフランス（クレルモン・フェランとオルネ・スボアおよびパリ）でフィールドワークを行ったほか、その成果や関連する主題について、神戸大学とパリの研究機関（L'Ecole des Hautes Etudes en Science Sociales と Institut d'Etudes Politiques）で各 3 回、計 6 回の会議を行いました [(5)]。

この共同研究は、産業病と公害病に関する健康リスクの「公平性」と、それに密接に関連する「環境正義」の視点から研究を進めたものです。（1）日本とフランス

二つの社会の比較研究の観点、(2) GIS 用いるマクロな自然科学的手法と聞き取りを基盤にしたミクロな人文学的方法の比較統合の観点、(3) 珪肺・じん肺と中皮腫という研究対象の比較の観点、(4) リスクに関する自然科学的認識とリスクに関する社会的評価の比較と統合の観点から研究は行われました。

日本側は、神戸大学所属の松田毅（哲学環境倫理学）、油井清光（社会学）、白鳥義彦（社会学）、藤木篤（工学倫理）、早稲田大学の村山武彦（社会工学）、立命館大学の中谷友樹（健康地理学）、労働科学研究所の毛利一平（疫学）が参加し、フランス側は、社会学者のポール・ジョバンを代表とし、歴史学者、疫学、医学の専門家が加わりました。特に、日本側は最終年度には横浜市鶴見区で旧朝日石綿工場周辺の健康被害に関する共同調査研究を地元の NPO および住民グループとともに実施しました。その結果は、住民の集会でお話させていただくとともに、2011 年 7 月に東京で開催された日本環境会議でも報告しています。このような共同調査の背景には、アスベストによる健康被害のひろがりの把握について、環境省のリスク調査が十分に実態を明らかにしたとは言えない、と思われる状況があることを付け加えておきたいと思います [(6)]。

2011 年 8 月には泉南国賠訴訟に関する控訴審判決が出ましたが、最近ではアスベスト問題に関する、マスコミの報道も減ってきたのが実情です。アスベスト関連疾患の内、特に中皮腫の場合、病気の進行が早く、被害者が次々に亡くなられていくこともあり、アスベスト問題に関する問題意識の継承は必ずしも十分とは言えないように思われます。あらためてアスベストによる健康被害の深刻さと問題の普遍性を示すためにも、マンガによる問題提起の十分な喚起力を活かし、市民・青少年の関心を高め、リスクと向き合うことのできる市民社会の形成に寄与したいと考えます。今後、2012 年の前半に作品が出版される予定です。

## マンガの内容あらまし

ストーリーは協力者の取材からの掘り起こしを基に、実話だけでなく、人物設定上のフィクションを交えています。

### 1 章「クボタ・ショック」:

アスベストによる健康被害の問題が広く知られる契機となった事件。市民たちの粘り強い活動を中心に現在までを描きます。

**2 章「アスベストの説明」:**

鉱物、素材としてのアスベスト、関連疾病などを略述します。

**3 章「洗濯曝露」:**

家族の持ち帰る作業着の洗濯で曝露し、発病する事例を描きます。

**4 章「ある工場労働者の一生」:**

第二次世界大戦時、製鉄所の熟練築炉工であった労働者が、南方の激戦地から呼び戻され、生き延びたが、戦後、肺の病に倒れる物語。労働者は会社に恩義を感じ続けるが、家族は複雑な思いに駆られる点に問題の複雑さを描きます。

**5 章「泉南」:**

「クボタ・ショック」以後、始まった市民運動のリーダーによる聞き取りを基にして、泉南の石綿産業の歴史を踏まえて創作しました。家族を次々と襲った病気に苦しみながら、管理責任を怠った国家に謝罪と賠償を求め、裁判に立ち上がる人びとを描いています。

**6 章「震災」:**

阪神大震災の経験をもとに、倒壊建物から飛散するアスベストの危険を調べる、高校生がどのように曝露から身を守るかを語ります。

**7 章「アスベスト・ポリティクス」:**

アスベストをめぐる国内外の政治と社会の歴史を点描します。軍需・重工業を始めとした産業界の動向、医学者らの警告と被害者・市民運動の始まり、報道と法整備の立ち遅れ、「管理使用」の限界と「虚偽」などを記憶する年表風の叙述です。

**8 章「労災」:**

被害者の苦難の一つが、自身の病気や家族の死に対する「補償」の問題です。学生が自ら行ったインタビューを回想しながら、労災保険、「石綿による健康被害の救済に関する法律」の複雑な手続き等の問題を語ります。

**9 章「アスベストシンポ」:**

互いを励ましあい、様々な活動に身を投じてきた人々がアスベスト根絶を目指したシンポジウムを描いて、終章とします。

（マンガには読者の理解を助け、必要な情報提供を行う「注」が含まれます。）

以上です。

## 註

(1) 筆者の環境リスク論の観点は、松田毅「環境リスクの倫理学序説」『倫理創成研究』1 号、2008 年 pp.1-18.「リスクと安全の哲学」『応用哲学を学ぶ人のために』戸田山和久・出口康夫編、世界思想社、2011 年 pp.47-57、また原子力発電の環境リスクも含む、一般的な見通しについては、シュレーダー=フレチェット『環境リスクと合理的意思決定――市民参加の哲学』2007 年、松田毅監訳、昭和堂を参照いただければ幸いです。

(2) 精華大学からは、竹宮惠子、板橋しゅうほう、小川さとし、都留泰作らの教員と大学院生の方々が参加されています。

(3) 例えば、松田毅「子どものアスベストリスクの問題　日仏二社会のけい肺・アスベスト疾患――空間的マッピングと人文学的研究」報告として」『倫理創成研究』3 号 2009 年 pp.93-116.など。

(4) ポール・ジョバン、パリ・ディドロ大学准教授の示唆。このシンポジウムは、大島秀利著『アスベスト―広がる被害』岩波新書 2011 年 199 頁で言及されています。

(5) 研究の趣旨については、以下をご参照ください。「第 1 回研究報告　日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患――空間的マッピングと人文学的研究」「日仏共同研究の目的と課題について」『倫理創成研究』2 号 2009 年（pp.45-83）。その他、有志で疫学関係の国際学会、EPICOH-Medichem 2010 Occupational Health under Globalization and New Technology, Taipei, Taiwan Veteran General Hospital で *How to make good epidemiology with wrong numbers? A multidisciplinary approach of silicosis and asbestos related diseases in France and Japan* の共同セッションを持ちました（2010 年 4 月）。

(6) 松田毅「横浜鶴見区のアスベスト健康リスク調査における「登録もれ」に関する考察」『倫理創成研究』4 号 2011 年 pp.86-113.

（神戸大学大学院人文学研究科・教授）